



10 岩上亀 加藤龍雄か 一点

大正十四年(一九二五)頃
銀製 二九・七×四四・〇×二五・六

亀は古来、龍や麒麟、鳳凰とともに「四霊」として神聖視されて、特に亀は吉凶を映し出すものとされた。中国では亀の寿命は「万歳」や「千二百歳」と様々にとらえられたが、日本では「鶴は千年、亀は万年」と鶴に比べてより長生きとされ、鶴との取り合わせばかりでなく、亀そのものが単独で置物や絵画の題材として取り上げられることも多く、吉の動物として親しまれてきた。本作は、ブロンズの岩の上に、銀製の三四の亀が載る置物。いずれも、甲羅から毛様のものを引きずる蓑亀の姿で表されている。

亀の腹に「龍雄」の刻銘があり、No.8とその筆跡も近似することから同じ作者によるものと考えられる。大正十四年の大正天皇大婚二十五年の折に、公爵一條実孝より献上され、その後秩父宮家に引き継がれた品である。

12 鶴亀 高村光雲・竹内久一 一对

明治四十年(一九〇七)
木彫 彩色 像高一八・四

能楽「鶴亀」を題材に、演者の舞姿をとらえた作品で、面を着けない姿、子方(子供)が演じる様を表している。「鶴亀」は主に正月に舞われる祝言能の代表的演目で、中国の皇帝が宮中で華やかに新春を言祝ぐ様を表現した吉祥の舞である。

本作は、明治四十年に華族一同より献上された桑木地飾棚の棚飾り品のひとつで、棚の最上段に置かれるもの。棚の制作は華族会館より東京美術学校(現東京芸術大学)に依頼され、全体の考案は岸光景とその門下にあった同校図案科教授島田佳矣による。棚をはじめ各棚飾り品は当時の帝室技芸員二十五名全員によって分担制作され、この作品は鶴を高村光雲(一八五二〜一九三四)が、亀を竹内久一(一八五七〜一九一六)が担当した。



11 群亀 中川寿雄か 一点

明治期(二十世紀)
牙彫 一・一〇×一四・五×五・三

一番大きな亀を下にして、大きさが異なる五匹の亀が重なり合った様子を、牙彫で表した置物。本作は日本特産のイシガメをモデルにしたものと思われ、足裏まで写実的にとらえられている。裏面に「寿雄」と刻銘があり、明治から大正期頃の牙彫家、中川寿雄による作品かと考えられる。秩父宮家旧蔵品。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

福やぶござれ ― 寿ぎの美・新春に集う

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 42

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十九年一月六日発行

©2007, The Museum of the Imperial Collections